こだま

要介護2以下 福祉用具レンタル全額負担へ

在宅生活の命綱 なぜ

費用膨張 国切り込む

カウントダウン 2025年

介護保険制度の見直しの議論が進む中、「要介護1、2」の人を対象にしたサービスの一部が切り捨てられる可能性が出てきた。その一つが、車いすや手すりなど福祉用具のレンタル費だ。いまは所得に応じて1割もしくは2割負担で利用できているが、国は要支援の人も含めて2018年度から全額を自己負担にするという。「在宅生活を続けるための命綱なのに」と、利用者や福祉関係者からは反発の声が上がっている。（門脇正樹）

デイケアに向かうため、レンタルした手すりを使ってベッドから起き上がる友永さん㊨と見守る弥生さん（広島県北広島町）

「これがあるから、1人でも家におられるんよ」。要介護2の友永正志さん(88)＝広島県北広島町＝は、ベッド脇に据えた手すりを両手でつかみ、ゆっくり体を起こした。2年前、転倒した弾みで腰を痛めて入院。以来、起き上がったり、立ち上がったりする動作を手すりに頼ってきた。

現在は手すり2基と歩行器1基を、1割負担の月額860円でレンタルしている。これらを使えば、同居している長女の弥生さん(52)たち家族の手を借りずにトイレに立ち、庭や家の周りを散歩することができる。そのかいあって、友永さんは今春、要介護度が3から2に改善した。

担当ケアマネジャーの梅田久美子さん(37)は「家族に心配を掛けまいと、福祉用具を使って自分の『できる力』をフルに発揮して頑張っておられる。だから脚力など残存機能を維持できているのでしょう」と話す。

保険全体の1%

福祉用具は一方で、弥生さんの生活にも影響を及ぼしている。住宅ローンの支払いがあと9年残る、余裕のない生活。友永さんが付きっきりの介護を必要としないおかげで、弥生さんは日中にアルバイトに出掛けることができている。

レンタル費が全額負担になったら―。「生活を切り詰めて借り続けるしかない。購入は難しそう。父の状態が変わる度に買い替えるなんて無理ですから」と弥生さん。「元気な父と一日でも長く暮らしたい。そのために必要なサービスを、なぜ国は奪おうとするのでしょうか」

厚生労働省によると、介護保険でレンタルできる福祉用具は手すりや歩行器、車いす、電動ベッドなど11種で、14年度には全国で約2707億円分の利用があった。うち、要介護2以下の利用は約1129億円で、介護保険全体の費用10兆円の1%強にすぎない。

「介護離職招く」

ただ、団塊の世代が75歳以上となる25年度には、介護保険全体の費用がいまの約2倍の21兆円程度に膨らむと推計されている。国は費用を抑えるため、要介護2以下の人が使う「1%の領域」にまで切り込んだかたちだ。

これに対し、利用者から「年金生活を圧迫する」「活動量が減り、寝たきりや引きこもりを助長する」といった不満の声が続出。レンタル事業者でつくる日本福祉用具供給協会は、ケアマネジャー約5万4千人分の反対署名を集め、7月に同省に報告した。同協会広島県ブロックの矢野勝公ブロック長(62)は「家族の負担が増え、介護離職の引き金になりかねません」と強調する。

県介護支援専門員協会の荒木和美会長(50)は「介護度だけを見て、一様にサービスを切り落とすことに違和感を覚えます。福祉用具のおかげで、自分らしい生活を送っている人は少なくありません。個別の状況をきちんと把握し、サービスの必要性を審査した上で、判断すべきです」と指摘する。

団塊世代が75歳以上になる2025年まで、あと9年。超高齢社会のこれからを考えます。

老年賛歌 ❷

小檜山博

単なるキザでもいい

ぼくは着る物に掛けるお金があるなら、うまい物を食べてうまい酒を飲んだほうがいいと思う、奥ゆかしさの少ない人間である。家ではシャツがしわだらけだろうが、セーターの袖口にほころびがあろうが気にならない。ただ、妻に見つかって「繕うから、脱げ」と言われるのが面倒なので、隠して着ている。講演へ行くとき、ズボンの折り目が消えていても、ま、いいか、と思ってしまう。

しかし20代の独身のころのぼくは、こうではなかった。会社に勤めていたが、1枚しかない下着を替えるのも、面倒くさくて抵抗していた。やがて抵抗するのも面倒で、従った。

70歳を過ぎると、妻が買ってくれるセーターやコートが明るい色彩になり、彼女がミシンで縫ってくれるワイシャツもだいだい色や赤が増えた。彼女は自分の着る服をほとんど自分で縫うため、ついでに作ってくれるぼくのワイシャツも100枚ほどになった。

ともあれ「年寄りはただでさえ」という言葉が身に染み、ぼくはいま外出時にはアイロンの掛かったズボン、磨いた靴を履き、ワイシャツは毎夜、襟首と袖口だけ洗って朝までに乾かし、月賦を払い切っていない安物の背広のズボンも毎晩、敷布団の下に敷いて寝押しをした。

給料が安くて下着や靴下も買えないのに、10日に1度は理髪に通って髪をリーゼントにした。つまり人から見える部分だけのおしゃれで、女性にもてたい一心でのいじましい振る舞いだったが、ぼくなりに懸命なのであった。

60歳すぎ、妻から「年寄りはただでさえ汚いと思われるのだから、意識してきれいにしなさい」と言われたが、髪を洗うの頭にはハンフリー・ボガートがかぶっていたのに似ている中折れ帽子を載せ、背筋をピンと伸ばしてゆっくり歩いている。

通りでぶつかりそうになったら相手を先に通し、買い物時は店員さんに「お世話さま」と言い、バスや電車の中では他の人を座らせ、常に「ありがとう」「ごめんなさい」の言葉を使う。

こんなのは単なるキザで、おしゃれとは言わないのかもしれない。しかし「ただでさえ」と言われる老人であるぼくとしては、こういうのもおしゃれと考えたいのだが、どんなものだろう。

（作家）

絵・小山内仁美

青春時代、京都の大学で社会福祉を学んでいました。3回生になって福祉実習、施設実習、教育実習と社会に出で、昭和53（1978）年には、奈良県の特別支援学校で2週間の教育実習をさせてもらいました。